

ナチス時代のリルケ

1940年代前半に読む抒情詩人

黒子 康弘

はじめに

ソクラテスの言を俟つまでもなく、弁論ないしレトリックにはいたずらに人心を扇動するものと、魂の教育に役立つものの二種類がある。しかし本来その何れをも目指していないはずのものが、何かのきっかけで、その役割を突然担わされることがある。詩人存在がその典型である。ここで「詩人存在」といったのは、詩人は一旦認知されると、その存在そのものが何かを自ずと表象してしまうという意味においてである。そもそも抒情詩は、きわめて主観的な言葉遊びの領域に発するものであって、本来他人に聞かせるための言葉ではない。にもかかわらず、結果として他人の心を揺り動かし、感動させ、説得させ、陶冶に役立つことすらある。その意味で、詩人存在はある特定の社会的機能を体現する。このような詩の来歴と機能との間の不整合は、近代の詩人存在を考えるにおいて汲みつくせぬ問題を孕んでいるが、それは、戦時下や民族抗争下という特殊な状況において、極限にまで高まる。例えば、ある陣営（国家、民族）だけのために生まれたわけではない人物が、その陣営の利益のために利用されるということは、歴史において何度も繰り返されてきた。プラハ生まれのドイツの詩人リルケもその例外ではない。むしろその最も典型的な例の一つであるといってもよいかもしれない。本論では、リルケの詩が語り出されて来る根源と、詩人に後から割り当てられた社会的機能の間にある不整合を、ナチス統治下ドイツという時代に絞って、考えてみることにしたい。そのことによって、逆にナチス統治下のドイツ（および周辺国）の、文芸批評のハビトゥスを明らかにすることができると考えられる。

1. プラハのリルケ、あるいは抒情詩の偽善

リルケは1875年、ボヘミアの古都プラハのドイツ人支配者階級の子に生まれた。住民の大多数はチェコ語の話者であったが公用語はドイツ語¹⁾であるという特殊な状況下で幼少期を過ごしたリルケは、当時のプラハのドイツ人家庭の慣習に従い、ドイツやオーストリアの「ドイツ語圏」の学校の寄宿舎に入って教育を受けることになる。リルケはボヘミアという実際の生まれ故郷と、ドイツという言語的・文化的・教育的故郷の分裂の中において、成人するまでの時期の大部分を引き裂かれて生きざるを得なかった。ただし若きリルケはこの分裂に手をこまねいていた

わけではなく、またどちらか一方の陣営だけに肩入れすることもなく、むしろその亀裂を修復する「韌帯」を創造するために文芸活動を行おうとしていた。「創造」というのは、従来の伝統的な「韌帯」がその有効性を失ってしまっていたため、一から新たに創られねばならなかったからである。有効性を失った伝統的な「韌帯」の例としてリルケが第一に考えていたのはキリスト教、とりわけ「カトリック」である。そのことをよく表す詩がある。

聖人たち²⁾

大きな聖人像や小さな聖人像を
どの村でも祭っている。
木造と石造の上品な、
大きな聖人像や小さな聖人像を。

聖アンネと聖カトリーネ、
夢のなかに姿を見せた聖人たち、
人々はそれを造って傳えている、
聖アンネと聖カトリーネに。

ヴェンツェルもそこに含めよう、
あまり祭られてこなかったから。
多くの聖人が忘れられている—
そう、聖ヴェンツェルを含めよう。

しかし、このネpomケン！
城門の通路のすき間から顔を出し、
橋の上で踏ん反り返っているのは、
ネpomケン、ネpomケンばかりだ！

プラハ時代の若きリルケの政治姿勢が明瞭に現れている一篇である。「ヴェンツェル」を評価し、「ネpomケン」を拒否するその素振りとは、ボヘミアのチェコ人たちにドイツ人たちが無理やりあてがった「カトリック」の虚偽性、敢えて言えば反宗教改革以降の「カトリック」に対する告発である。すなわち「聖ヴェンツェル」(聖ヴァーツラフ³⁾)が、由緒正しいキリスト教の聖者であると同時にボヘミア人の民族的聖者であるのに対して、「聖ネpomケン」は逆にボヘミア人の民族意識の高揚を予防的に挫くために反宗教改革陣営によって急ごしらえで設えられた、根柢の薄弱な疑似聖者であるという思いが、リルケにこの詩を書かせている。「ネpomケン」については次のような話が背景となっている。

「ネpomケン」ドイツ語で Johannes Nepomuk (1345–93)、チェコ語で Jan Nepomucký は、神聖ローマ帝国最古のカレル大学で神学を学んだ後、司祭として宮廷に仕えたドイツ系ボヘミア

人である。伝説によれば、或る時王妃の懺悔を聴いたところ、王であるヴァーツラフIV世（1378-1419）に告解の内容を明かすように言われた。しかし職務に忠実な彼はそれを頑なに拒否したため、舌を切られカレル橋から突き落とされ溺死した。そのとき奇跡が起き、水面に5つの星が浮かび上がるとともに、降りてきた天使たちによって昇天させられたという。もちろん実際は、当時のブラハの大司教とヴァーツラフIV世の政争に巻き込まれ、拷問の末絶命したものの、暴君によって殉教した聖者という役割を、カトリック教会から後に付与されたというのが正しいようである。具体的には、1721年に福者となった後1729年に列聖されているが、死後数世紀が経ったこの時期に、しかも手続きが開始されてからとんとん拍子で聖者になったのには、当然訳がある。つまりいわゆる「白山の戦い」以降の反宗教改革の一つの旗印として、カトリックによって「異端者」フスの対極にある存在としての役割を果たすべく期待されたからである。その思惑通り「聖ネポムケン」崇拝は広く行き渡り、水難防止聖人、巡礼者の守護聖人として、チェコ全土の橋や広場などにその像が設置されたのである。この状況は、チェコ民族主義が息を吹き返してフスの記憶がよみがえる19世紀半ばまで続いたが、その後事態は急転した。1848年のウィーン3月革命期の混乱の中において、チェコの民族意識は、もはやカトリックという枠におさまりきらない強大なものであることが明白になった。その後はボヘミアの地を舞台として、少数支配者のドイツ人に対するチェコ人たちの粘り強い抵抗の歴史が続くことになり、その成果は第一次大戦後の1918年のチェコスロヴァキア独立に結びついた。それに伴って、各地にあった「ネポムケン」像の多くが破壊された。

リルケの詩が書かれたのは、ちょうど19世紀が終焉に向かいつつあるブラハにおいてであり、リルケは以上の歴史的経緯を敏感に感じ取り、それをあからさまに表現している。あからさま過ぎる表現はもちろん抒情詩としては相応しくないものであるが、若きリルケのいわゆる「民族問題」に対する立場について明確に示す一つの資料としては有効である。リルケはこの詩で、反カトリックという立ち位置をとることで、ドイツそのものを否定することなく親チェコ感情を表現しようとしている。しかも書かれている言語はドイツ語である。ドイツ語は否定していない。リルケは親チェコの感情を持ちながら（なぜならそれは彼の現実の生まれ故郷だから）、完全に反ドイツとは言い切れない苦しい立場（なぜなら彼はドイツ人であり、ドイツ語母語話者であるから）を、結果的にこの詩は暴露している。歴史的背景を念頭にさらに付言するならば、この詩は見かけの無害さとは裏腹に、極めて偽善的な内容を含む詩であるとも言えるであろう。なぜなら現実の世界におけるドイツ人とチェコ人の闘争、政治的駆け引きはこの時期熾烈を極めていたからである。

偽善的であるというのは、しかし、抒情詩の、いやさらに言えば融和的な内容を持つ文学表現の本質である。「アウシュビッツ以降に詩を書くことは野蛮である」（アドルノ）をもじって言えば、「民族抗争の時代に抒情詩を書くことは偽善である」とでも言えようか。しかし「偽善」が許されるのはまだそこには希望があるからである。若きリルケも、その無知ゆえに、希望を持っていた。ドイツ人とチェコ人の融和という希望、カトリックという古びた鞅帯に代わって、自らこの引き裂かれた街ブラハの鞅帯そのものとなろうという希望である。この希望は、議論を先回りして言えば、リルケの死後、ナチスドイツによって、いや正確にはナチスドイツに阿ね、その意志を斟酌して活動した文学者、知識人たちによって、顛倒した形でリルケの詩の中に読み

取られようとした。

2. 「反」感情移入のトポス

実際にナチスが政権をとってから敗戦へと至る10年余りの期間、特にその後半に、ドイツ国民の靱帯としてのリルケの評価は急速に高まったように見える。例えばシュトゥットガルトの Alfred Kröner 出版の文学レキシコン『我らの時代の詩人たち－ドイツ現代詩人のプロフィール』の1938年の初版にリルケの記載はなかったが、1941年刊の第4版には8ページにわたって念入りの記載がある。その冒頭にはこのような言葉がある。

スラブ的な芸術や文化、ロマンス系の芸術や文化に多大な関心を寄せていたリルケではあったが、その内奥においては常にドイツという本源に属しており、現代の精神的なヨーロッパ世界にとっても、ドイツ性 (Deutschtum) を持った最も誉れ高い偉大な詩人のひとりとして見做されている。⁴⁾

このような言説があったこと自体、現代ではすっかり忘却されている。たとえ何かの拍子に発見されたとしても、大抵の場合、今日のドイツ文学の常識に照らして無効とされるか、ナチスという特殊なヘゲモニー下にしか成立しえない例外的な言説であるとして無視されるであろう。それはナチス同様に、完全に間違っていたのだ。リルケを「ドイツという本源」や「ドイツ性」という座標上に置くこと自体荒唐無稽であり、問いとして不可能であるという訳である。しかし実際に、当時の雑誌や書籍、パンフレットの類まで含めて様々な場所で、リルケを「ドイツの詩人」として称揚する言説は無数に見出されるのである。このことを無視することはできない。勿論問題のレベルは違うが、あえて言うならば、ナチスが存在しなかったと言えないのと同じで、ナチス期のリルケ称揚の言説も抹消することはできないであろう。さらに敷衍すれば、ドイツ史の専門家がナチスを決して忘却し得ないように、ドイツ文学者にとってナチス期の文学的言説も忘却し得ないものでなければならない。もし忘却していれば発掘しなければならないのである。

このようなことをわざわざ言わねばならないのは、リルケという詩人がもはや「過去の詩人」になったということである。20世紀を通じてリルケは同時代の詩人として、感覚的、直観的に受容され、まるで我がことのように論じられてきた。強力な磁場を持つ詩人は、時間的懸隔を超えて遙か遠くまで作用する。そのような詩人には、時代に先駆けてある種の「予感」を言葉にする能力があるためであるが、実際のこととしてリルケの磁場は没後半世紀を超えて広がっていたのである。しかしその磁場を我々は完全に脱した。リルケに我々はもはや感情移入できない。あえて付け加えれば、リルケという詩人は21世紀になってようやく、そしてついに考古学的な研究の対象になったのである。

もちろん世界的に見ればこれまでもリルケに対する感情移入的でない読み方はいくつも試みられてきた。2人の英語圏の文学者がその代表格である。一人は1970年代末のポール・ド・マン、もう一人は戦中戦後に活躍したユード・C・メイソンである⁵⁾。いずれもドイツ的な詩的センチメンタリズムを外部から批判する目を持っており、リルケの詩を、あくまでも感情移入とは無縁

の感覚的虚構として定位し、美学的に分析する方法をとっている。もちろん彼ら自身にも時代の影が差している。ド・マンにはポストモダン、脱構築の影、メイソンには戦中戦後のドイツという厄介な存在との対抗意識の色合いが濃い。抒情詩を感性学、あるいは美学的対象にしようとする点で、両者は根を同じくするが、ド・マンは音韻の問題に焦点をあて詩的言語の表層の振舞いを分析し、メイソンはリルケをドイツ抒情詩の系譜に連なるものとして文献学的に追究しようと試みた⁶⁾。

この際2人の共通の敵となっていたのが文学的姿勢としての「感情移入」である。そしてさらに言えば、その姿勢のナイーブさを隠蔽し存続させるのに役立った理論的隠れ蓑としての実存哲学であった。この哲学に影響された文学者たちは、リルケを、現代社会の限界状況に晒される人間の本質を詩作した特別な詩人として、超越的な存在へと高めた。その文学論は多くの場合、リルケという教祖的存在への無条件な感情移入を暗黙に前提としているが、ド・マンやメイソンにとっては、抒情詩の読者が感情移入する際に真に問題なのは、実存哲学が前提とするような、引き裂かれ不安におびえる人間存在という漠然とした観念ではなく、むしろ読者を引き込む際に作用している、リルケの実際の詩的戦略、文彩、メタファー、音韻の振舞いに他ならないのである。

ここで確認しておかなければならないのは、実存哲学の殻を被った感情移入詩論が、メイソンの活躍し始めた戦前のドイツから、ド・マンがポストモダン批評の楔を打ち込む1970年代末までの半世紀余り、リルケ研究の中心に居座っていたということである。この期間は長かった。ただし同じ実存哲学の殻を被った感情移入詩論とは言っても、1930～40年代前半と40年代半ば～70年代末では、そのベクトルは全く異なっていた。以下では、メイソンがいかかわしきを感じ取った1930～40年代前半の感情移入論に焦点を当てることにする。そこでは「ドイツという本源」あるいは「ドイツ性」(Deutschtum)という感情移入のトポスが問題になる。この文学的トポスもまた、もはや感情的・感覚的に把握しえないという意味において、考古学的対象になっていると考えられる。この点において本論は、メイソンやド・マンの反感情移入詩論とも、立場を異にするものである。

3. プロパガンダ的文学史

詩人の死からちょうど10年後の1936年に刊行され版を重ねた大部の人物事典『偉大なるドイツ人たち』(Die Großen Deutschen)の1942年版は、今となっては辞典としてよりも歴史的資料として価値のあるものだが、そこには、リルケに対する綿密な記述が見られる。そしてその中にも「ドイツ性」(Deutschtum)という言葉が見いだされる。ただしここでは、抽象概念としてのドイツ性というより、この言葉のもう一つの意味である、集合的にとらえた「ドイツ人そのもの」が念頭に置かれている。

おそらく彼(リルケ)は、生まれながらにして、ドイツ帝国の外側に生きるドイツ人(Deutschtum)という運命のもとにおかれたのであった。⁷⁾

そのような運命を背負った詩人の人生を、この人物事典は、「故郷を持たないが貴族と軍人の血

筋を意識していた」としたうえで、その詩作の特徴を「ドイツとスラブの対立をコスミッシュで神的な空間で解消しようという試み」⁸⁾と規定している。この規定は、本論の最初に引用した詩に読み取れたように、若きリルケにおけるドイツとスラブの融和という希望に照らすと、強ち間違ではないように思えるかも知れない。しかし「コスミッシュで神的な空間」は後期リルケの詩の特徴であり、若きリルケがこの詩的境地へ到達するのは、長い紆余曲折を経た末であることを辞典では捨象してしまっている。しかもこの境地に至った後のリルケには、ドイツとスラブの融和という理想はすっかりと抜け落ちてしまっていた。つまり後期リルケの「コスミッシュで神的な空間」は、決してドイツとスラブの融和を意図して歌われたものではないのである。

それでは何故この人物事典『偉大なるドイツ人たち』では、若きリルケの理念と、後期の成熟したリルケの世界観を短絡するようなことが書かれているのか。それはこの人物事典のイデオロギー的性格、あるいはこれが書かれた時代の意志の短絡がそうさせているのである。そもそもリルケ後期の詩的境地が単純に「融和的」と規定できるのかも、それ自体議論の余地が十分にある。例えば数多いリルケの詩作品のなかで最も「コスミッシュで神的な空間」と呼ぶにふさわしい詩的世界を創り上げている『ドゥイノの悲歌』は、むしろ「融和」を徹底的に拒絶している。その象徴的な例として第4の悲歌から次の詩句が挙げられるだろう。

我らはしかし、一事に心を籠めているときに
はやくも他事の損失を感じ取っている。葛藤対立は
我らにもっとも近いことなのだ。愛する者同士は
求め合う中、互いに、広さ、狩り、故郷を期待するだろう。
だが相手に見出すのは常に断崖の果て。
ほんの刹那素描が形として認識されんがため、
それとは異なる地の色彩がさんざん苦心して
塗りたくられるのだ。⁹⁾

「葛藤対立」の原語は Feindschaft であり、これは「敵対関係」「敵意」「反目」とも訳せる言葉である。リルケを隅々まで読みこんだ者なら、後期の作品における「コスミッシュで神的な空間」の生成に仮に同意したとしても、それが単純に「葛藤対立」の解消、あるいは「融和」を説くものではないことは明白である。つまりナチス時代の人物事典『偉大なるドイツ人たち』のリルケに対する「積極的」評価は、誤読、あるいは誤読への意志の上に成り立っているのである。

このような「誤読」に基づく印象操作は、40年代に入ると特に念入りになってくる。例えば Fritz Lübke と Heinrich Fr. Lohrmann の手になるドイツ文学史『過去と現在のドイツ文芸作品－ドイツ文学案内』（初版1940年）において、リルケは、北欧神話、中世英雄叙事詩、さらにゲーテの古典主義から現代ドイツの民族文学へ連続と続く「正統」な文学史の中に位置づけられている。そこでリルケが分類されるカテゴリーは、自然主義や印象主義を主に意味している「混乱と退廃」(Verwirrung und Entartung)の章¹⁰⁾の後に設けられた「民族文学の展開」(Entfaltung zur völkischen Dichtung)の章¹¹⁾の中の冒頭の節「先触れと警告者」(Rufer und Mahner)である。ここでリルケに期待されている役割は明確である。すなわちゲーテの古典主義時代に一つ

の頂点を極めたドイツ文学は、ドイツ諸領邦が統一と近代化に苦心した19世紀も末になってついに混乱に陥ってしまった。この混乱の中にあるドイツ精神を、文学の力によって再生へと導く一種の使徒という位置づけである。これは当時においては極めて高い地位である。他にこの地位を与えられた詩人はパウル・エルンスト、シュテファン・ゲオルゲ、オットー・ツァ・リンデの3人、哲学者はフリードリッヒ・ニーチェ、パウル・ド・ラガルド、ユリウス・ラングベーン、ヒューストン・スチュアート・チェンバレンの4人である。つまり玉石混交である。その詩作＝思索の内容は問題ではない。そのイメージによる社会的機能がここでは重要なのである。

リルケ以降の詩人によって乗り越えられたとされる文学的位相「混乱と退廃」を論じた章は以下の各節によって成っている。1. 現実の歪み（自然主義）、2. 印象の芸術（印象主義）、3. 根なし草である。前者2つは別として、「根なし草」という文学的カテゴリーが特別に設けられていることに驚く。この「根なし草」とは何を意味しているのか。少々長くなるが、第3節の一部を訳出してみる。

リューベックの商売人の息子でユダヤ人と結婚して、現在は移民として海外に渡って扇動者として生活しているトーマス・マンとその兄ハインリッヒ・マンは、その小説の中でドイツ市民階級の健全さと強さを蝕んできたのである。読者に対する効果を計算に入れたざる賢い単語の選択や構成が彼らの手段であり、それによって、病気で、虚弱で、痴呆で、老衰した人物たちや状況を描くのである。

ヴァッサーマン、ヴェルフェル、トラー、カイザー、ツックマイアーといったユダヤ人たちの著作、とりわけドイツの本源を無遠慮に嘲笑するリオン・フォイヒトヴァンガーの著作によって、ユダヤ根性および民族的根なし草の思考が、ブルジョア階級の大部分へともたらされた。一方、ドイツ人労働者や農民は素朴で純潔的感情に満ちているので、以上のような毒書の類には何の関わりもなかった。

ドイツ人の生活の無意味な混乱と退廃の一つの印が、レマルクの悪名高い戦争小説『西部戦線異状なし』の出版である。あの時代をともに生きていない者には、この本の途方もない蔓延を理解できないかもしれない。それはドイツ人の前線精神、男らしさ、責任感に満ちた固い信念の行為を、不快なやり口で愚弄し、面目を失墜させたのであった。

民族から遊離したこれらの「三文文士」たちによって、文学の混乱と退廃の時代は恥ずべきどん底を経験してしまった。揺るぎない姿勢を誇る国家社会主義の勃興をもって、文学会においてもようやくこの時代に終わりが告げられたのである。¹²⁾

ここで「根なし草」の意味は明白である。それは第一にユダヤ人作家、そしてユダヤ人と関わってドイツを離れた作家のことである。その属性は、一概にブルジョア的、非戦的であり、その文章はドイツ人の前線精神、強く健全で責任感に満ちた信念を挫き愚弄するものだとされる。これは完全にナチスのプロパガンダそのものであり、もはや学術的な文学史の記述とは言えない。この時代に出版され、あるいは出版が許された文学史はどれも似たようなものであって、このこと自体は特に新しいことではない。ただしこのようなナチスの文学史観にとって積極的な意味を持つものとして、抒情詩人リルケの名が記載されていることとその問題性についてはあまり知られ

ていない。もっともこの本では、どのような点でリルケが、退廃したドイツ文学に健全さを呼び戻す先触れの役目をはたしているか説明は全くない。リルケは、詩作の内実への指示性を欠いた単なる記号として用いられているのである。極めて強引な形で、リルケはナチス的プロパガンダにとって有益とみなされている。次に見るように、体制派の文学者はさまざまな批評的装置を用いて、リルケのナチズム的位置を確定させようとしている。

4. 精神分析批判と実存

リルケを学問的な装置を用いて一見説得的に性格付けしているように思えて、実はその奥にナチス的プロパガンダを隠し持っている典型的な言説の例として、Georg Keferstein の雑誌論文『文学における象徴と実存』(Symbol und Existenz in der Dichtung) が挙げられる。掲載雑誌は今日においても権威がある Germanisch-Romanische Monatsschrift であり、その第29巻(1941年刊)に掲載されたものである。この論文は、当時のドイツの文学界の大立役者であったヘルマン・ボンダスの1939年刊の大著『文学作品の中のイメージ 第2巻 象徴の探求』(Das Bild in der Dichtung II. Voruntersuchungen zum Symbol) に則って「学問的に」ドイツ文学の象徴法を論じるという体裁をとっている。

議論の前提はフロイト流の精神分析的象徴論への批判である。その批判とは、フロイトのように文学的イメージ、文学的象徴表現の生まれてくる根源を抑圧された「無意識」へと位置づけるならば、意志に裏打ちされた人間精神の活動の全体性が失われ、人間精神の墮落が嵩じる危険があるというものである。仮に「無意識」の存在自体を認めるとしても、文学的創作の源泉を曖昧で正体の定まらない「無意識」へと貶めることは許されない。そのような意味で、精神的活動の全体性の守護神としてのゲーテに関するボンダスの見解が引用されている。

ゲーテが依拠していた無意識とは、精神分析学における抑圧された「無意識」とは全く正反対であって、詩人をその存在もろともに諸事物の連関の中に(ラーベがそう表現したように)引き込んで、まさにそうすることで詩人に全体性の中から語り創作することを可能とするような一つの「エス」として、今や理解されうる¹³⁾。

ゲーテに言及することで、フロイト的な「エス」すなわち、性欲動(リビドー)と死への欲動(タノトス)のみが詰まった「無意識」の批判、相対化が意図されている。その際ゲーテと並んでリルケもまた格好の素材となる。なぜならリルケは自分自身、フロイト流の精神分析への危惧を、精神活動の豊かな全体性の危機として表明していたからである。次は1919年9月12日付ゲルトルート・ウーカマ・クヌープ宛の書簡の一節である。

ところで奇妙なことに、ここでは(少なくともチューリッヒでは)精神分析が極めて押しつけがましい外観を呈するようになっていきます。つまりそれだけでなく後ろ暗いところのない当地の素朴な若者が、猫も杓子も精神分析を受けているのです。でも考えてもみて下さい。心の片隅のすべてが掃き清められピカピカに磨かれた殺菌済みのスイス人なんて一体なんで

しょうか。施術室のように無菌状態で陰影の失われた彼の心の中に、いったいいかなる内面生活が可能だというのでしょうか！¹⁴⁾

リルケも確かにフロイトの精神分析を批判している。ただしリルケはオペレーションによる「無意識」の無害化・無力化を主に懸念しているのである。無意識を豊かに包含した心こそが、芸術活動に最適な土壌であり、精神分析がそれを強制的に顕在化させることによって、せっかくの芸術家の生産性が著しく減少してしまうことをリルケは常に恐れていた。したがってリルケにとって、精神分析とは純粹に創作上の問題、表現の秘密に介入する「技術」の問題である。Keferstein の当該論文も、表面的にはこの問題を、文学的に扱うそぶりを見せてはいる。しかし、創作、表現の問題から、重心は徐々に「実存」(Existenz) へと移されるのである。

実存というこの概念には、個々人におけるあらゆる超個人的な連関と結びつきが包含されている。これらは、「深層人格」とその中に陥入している「集団的無意識」に仲介されて、最初から本質的に人間の心の再深部に属しているものである。偉大な詩人によるイメージと象徴の創造は、それゆえ、現実からの逃避などではなく、現実の内部で現実に対して実存の全体から下された創造的決断である。現実の中で詩人は人間として実存し、そのようにして創造的に高められるのである。¹⁵⁾

フロイト的な「無意識」の優位を断固として認めないために、それに代わって人間存在の全体性を保証する概念として「実存」が導入されている。ここでは「実存」が、精神分析学によって暴露された人格内部の分裂だけでなく、個人と共同体の分裂、創作活動と現実世界の分裂といったものまでをも再統一へともたすための包括概念として使われていることに注意が必要である。すなわち「実存というこの概念には、個々人におけるあらゆる超個人的な連関と結びつきが包含されている」のである。しかも、これらあらゆる超個人的な連関は、「深層人格」とその中に陥入している「集団的無意識」に仲介されて、最初から本質的に人間の心の再深部に属している。個人と共同体、芸術家の創作と現実とは、「無意識」の発見以降ますます切り離せないことが確認されている。

このような意味での「実存」を体現する現代詩人の代表へとリルケは Georg Keferstein によって祀り上げられる。確かにリルケはドイツとチェコの民族性の対立軸のなかに育って、そのどちらも取らなかった、そこにリルケの素朴な民族的莊嚴さが欠けている原因がある¹⁶⁾。そのかわりリルケは民族的対立軸を超越した詩的空間を造形することが可能であった。それもまた、Keferstein によれば、現実からの逃避ではなく、現実の内部で現実に対して実存の全体から下された創造的決断ということになる。現実の中で一人の人間として実存し、そのことで創造的に高められたがゆえに、リルケではプラハ生まれのドイツ人として単なる故郷喪失者にとどまらず、現実の人間の心に響く詩作へ至る隘路を切り抜けられたとして、Keferstein は次のように述べる。

それだけに一層驚くべきは、かつて人間が歩を踏み入れたものの中でも、最も狭い山の稜線上に、リルケがますます勇敢で確実な足跡を残したことである。さらに時代がますます根

抛を失っていったにもかかわらず、リルケがこの細く殆んど抛り所を欠いた道を抜け出て、大地という有機的な生命との関係を見出し保持したこと、そして、リルケが、星々の高みを断念することなく、詩人として大地とこの土地への帰依を表明したことも一層驚くべきことである。『ドゥイノの悲歌』や『オルフォイスに寄すソネット』において永遠の形姿を獲得したようなリルケの詩人精神は、そのようにして同時代の最も高貴な振舞を代表しつつ、はるかに時代を超え出る象徴的な実存を獲得しているのである。彼が生き抜き、詩作しつくしたものは、単に芸術家の特殊で現実味を欠いた問題性だけではない。詩人は彼と同時代の人々、そして彼の民族の多くの人々に代わって、活動し苦悩したのである。¹⁷⁾

様々な対立関係を融和へともたらず包括的な概念としての「実存」は、ここでは星々と大地の融和というコスミッシュな次元にまで拡大され、そして詩人個人のものであったはずの実存が、「民族」の実存へといつの間にか同化されてしまっている。しかし Keferstein 自身も認めているように、リルケの象徴法がコスミッシュな印象を与える理由は、民族、祖国、大地、故郷、家族、一族、子孫、祖先、人種、環境 (Volk, Vaterland, Boden, Heimat, Familie, Stamm, Kinder, Ahnen, Rasse, Umwelt) という、一般人にとっては自明の所与である存在領域にリルケが育っていないからであり、そのような領域に回帰もしないからである¹⁸⁾。リルケの詩作は、民族的荘厳さと引き替えに、コスミッシュな象徴法を手に入れているのである。それら2つは本来両立しえない。しかしここでは「実存」という魔法のキーワードの導入によって、リルケは両立しえないものを一挙に融和へともたらず特殊ケースとして例外的に容認されてしまうのである。

民族的荘厳さを欠くがゆえに本来容認されるはずのない詩人を、「実存」の一言で「学問的に」消化して我が陣営に引き込むことができた安堵感からか、Keferstein はついに本音を漏らしてしまう。

これらの領域 (筆者註:民族、祖国、大地、故郷、家族、一族、子孫、祖先、人種、環境) と個々の人間との結びつきは本質的なものである。これらは個人の実存に本源的に付き添っている。もしそれが無ければ、個人は自分自身ではない。これらの領域は、最終的にはすべてが民族に結びつき、この民族という概念に包摂される。その際我々は、民族を、ポングスよりももっと明確に、しかしその理論と矛盾することなく、厳密に生物学的な意味において理解したい。すなわち、ロタール・シュテンゲル・フォン・ルトコウスキーの言葉を借用すれば、「自己産出的かつ自己飼育的環境における遺伝継承の増殖共同体」として理解したいのである。¹⁹⁾

ナチス優生学の擁護者であったルトコウスキーのグロテスクな用語自体に驚くと同時に、むしろ一層同一のモノグラフにおいてリルケが高い評価を受けていることに驚かざるを得ない。しかしこれが現実である。このような言説が、この時代にリルケを幾重にも取り囲んでいたということが改めて確認できたのではないだろうか。

結語

胸の内をさらけ出してもはや自己韜晦の必要のなくなった Keferstein は、ハイデガーの用語を援用してこの後さらにあらゆるものを無条件に引き寄せる「民族の運命」について決然と語っている。

かくして「事実的実存」(faktische Existenz)をはるかに超え出る「脱自」(Ekstasis)によって、詩人は再び自らの民族の生存圏へと帰還させられるのである。²⁰⁾

このようなファシズム的レトリックが文学研究の名を借りてまことしやかに語られるドイツ本国の状況をよく知る立場にあった、英国の研究者ユード・C・メイソンが、リルケに対する、いかなる意味においても感情移入的でない読み方を追究したことはすでに述べたところである。そこにはアングロサクソンの実証主義や、特に30年代から40年代にかけてアメリカを中心に行われた新批評の影響が感じられるが、彼には「ドイツという本源」あるいは「ドイツ性」(Deutschtum)という感情移入のトポスに利用されるリルケを、詩人そのものとして救い出そうという意図があったようにも思われる。

このナチス的読解という感情移入の大渦からの解放は、直接的には国内や国外の文学者たちの努力ではなく(もちろんこの努力は戦後の文学的復興の糧となったが)、むしろナチスそのものの破滅によって成し遂げられた。しかしリルケの言葉への感情移入の渦自体はなくなることはなかった。もはやリルケが「ドイツという本源」あるいは「ドイツ性」というものと結び付けられて論じられることはなくなったが、それに代わる別種の感情移入の渦が、戦後リルケを取り巻くことになった。それは1979年にポール・ド・マンがポストモダン批評の狼煙である『読むことのアレゴリー』を出版する前後まで続いたと考えられる。この「感情移入」の正体はいかなるものか、それは1940年代のそれといかなる点が異なっているのか、それを調べるのが次なる課題となるだろう。さらに、「ドイツ性」とリルケの連関を探ることに対する過度のタブー視が戦後長く続いたことで、逆に見えなくなってしまっているものを発掘することも次なる課題の一つであると言えるであろう。

注

- 1) ターフエ言語令(1880年)では、公的機関で使われる言語を、機関内で用いられる内部の言語(内務語)と、住民との対応に用いられる対外的言語(外務語)の二つに分け、この後者に関しての「公用語」においてはチェコ語をドイツ語と対等に扱うことが決められた。その後バデーニの言語令(1897年)で、ボヘミアにおけるチェコ語の内務語への進出が決定された。ちょうどリルケの青少年期にチェコ語とドイツ語のせめぎあいが激しさを増していたことが分かる。
- 2) Rainer Maria Rilke: Sämtliche Werke, hg. von Rilke-Archiv in Verbindung mit Ruth Sieber-Rilke, besorgt durch Ernst Zinn, Bd. I, Insel, Frankfurt a. M. 1955, S. 31f. 全集の編者エルンスト・ツインによれば、この詩の収められた詩集『ラレスへの捧げもの』(Larenopfer)は1895年の晩秋プラハで成立し、その年のクリスマスに出版された。
- 3) チェコ語に近い表記では「ヴァーツラフ」となる。当該の詩はドイツ語の韻文であるので、韻やり

ズムを合わせる必要からリルケはドイツ語名である「ヴェンツェル」を用いている。ここでいう「ヴァーツラフ」すなわちヴァーツラフ I 世（在位921年-929年）は、神聖ローマ帝国の支配下で、ドイツ系聖職者の力を借りてボヘミアの地のキリスト教化を推進した人物である。しかしその親ドイツ政策に反対する陣営のクーデターを招き暗殺され、後に敬虔なキリスト教徒として列聖され、チェコの守護神となった。伝説によれば、祖国の危機に際して騎士たちとともに蘇り、敢然と戦ってチェコ民族を守り抜くとされている。

- 4) Vgl. Franz Lennartz: Die Dichter unserer Zeit. Einzeldarstellungen zur deutschen Dichtung der Gegenwart. Vierte Auflage. Alfred Kröner, Stuttgart 1941. ちなみに1938年初版の書名はDie Dichter unserer Zeit. 275 Einzeldarstellungen zur deutschen Dichtung der Gegenwartであり、275人の現代文学作家を扱っていることが分かるが、その中にリルケが含まれていないことが注目される。
- 5) 特に論者が念頭に置いているのは、以下の著作である。Eudo C. Mason: Lebenshaltung und Symbolik bei Rainer Maria Rilke. Hermann Böhlau Nachfolger, Weimar 1939. およびPaul de Man: Tropen (Rilke) In: Ders.: Allegorien des Lesens. Aus dem Amerikanischen von Werner Hamacher und Peter Krumme. Mit einer Einleitung von Werner Hamacher. Suhrkamp, Frankfurt am Main 1988 [Originalausgabe: Allegories of Reading, Yale University Press 1979]
- 6) メイソンはドイツ文学者でありその懐は極めて深く、その抽斗も多い。ゲーテの専門家でもあったメイソンでなければ到底書き得なかったとも思われる、リルケとゲーテの連関に焦点を当てた文献学的研究の問題作かつ金字塔とも言えるものが、以下の著作である。Eudo C. Mason: Rilke und Goethe. Böhlau, Köln und Graz 1958.
- 7) Die Großen Deutschen. Neue Deutsche Biographie. Hg. von Willy Andreas und Wilhelm von Scholtz in vier Bänden. Neue, völlig durchgesehene Auflage, Vierter Band. Propyläen Verlag, Berlin 1942, S. 451f. ただし1936年の初版の記述がどのようなものか、興味のあるところではあるが、残念ながらまだ論者はそれに当たることができていない。
- 8) Ebd. S. 453
- 9) Rainer Maria Rilke: Sämtliche Werke, hg. von Rilke-Archiv in Verbindung mit Ruth Sieber-Rilke, besorgt durch Ernst Zinn, Bd. I, Frankfurt a. M. (Insel) 1955, S. 697
- 10) Vgl. Fritz Lübke und Heinrich Fr. Lohrmann: Deutsche Dichtung in Vergangenheit und Gegenwart. Ein Führer durch die deutsche Literatur. Vierte Auflage. Carl Meyer, Hannover 1942, S. 184-192 (1940年に初版が出された書が1942年の時点で第4版を数えていることに注意)
- 11) Ebd. S. 193-251
- 12) Ebd. S. 192
- 13) Georg Kefenstein: Symbol und Existenz in der Dichtung (Zu Pongs' zweitem Band) In: Germanisch-Romanische Monatsschrift. Hrsg. von F. R. Schröder, 29. Jahrgang, Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, Heidelberg 1941, S. 2. ポングスの原著は以下を参照。Vgl. Hermann Pongs: Das Bild in der Dichtung. II. Band. Voruntersuchungen zum Symbol. N. G. Elwert'sche Verlagsbuchhandlung in Marburg 1939, S. 43
- 14) Rainer Maria Rilke: Briefe in zwei Bänden, zweiter Band 1919-1926, hrsg. von Horst Nalewski. Insel, Frankfurt am Main 1991, S. 28
- 15) Georg Kefenstein: ibid. S. 5
- 16) Vgl. Ebd. S. 9
- 17) Ebd. S. 10
- 18) Vgl. Ebd.
- 19) Ebd.
- 20) Ebd. S. 12